

本学における学生生活の適応に関する実態調査

片倉久美子・土田 幸子

A Survey on the School Life and the Adaptability to Our College Students

Kumiko KATAKURA and Sachiko TSUCHIDA

要 旨

平成2年の開学と同時に新カリキュラムに基づいた教育が開始され、試行錯誤を繰り返しながら現在に至っている。平成5年に完成年度を迎え、学生が短大生活全般においてどのようなニーズを持っているのかを把握する必要性を感じ、在学生の短大生活と適応に焦点を当てて、全学年に対し実態調査を実施した。その結果、「1年生は、学習を含めて何事に対しても積極的・意欲的に取り組もうという向上心が強く、学生生活に期待するものも多く適応行動がみられる。2年生は、学生生活全般に適応してきているものの、今まで以上の変化を求めようとする意欲が低下している。3年生は、学生生活における充実感・満足感を得るために、何事に対しても積極的に取り組みたい気持ちがある反面、長期間に及ぶ臨地実習のため、精神的・肉体的なゆとりが持てず不満が強い。」という傾向が認められた。

はじめに

看護婦不足が社会問題として大きく取り上げられる現代社会において、看護者の育成が急務とされ、4年制あるいは短期の看護大学が増設される中で、当短大は現代の看護教育の一端を担うべく平成2年に開学した単科の看護短期大学である。平成4年に完成年度を迎え、平成5年4月に初めての卒業生を社会に送り出している。高い教養と技術を身につけた看護者の育成と地域に根ざした看護を目指し、自然環境に恵まれた中で教育が行われている。新カリキュラムに基づいた看護教育を試行錯誤しながら展開し現在に至っているが、新カリキュラムのねらいとする“ゆとりある教育”を検討していく上で、学生が短大生活全般にわたり何を求めているのかを把握する必要性を痛感している。多様化する社会にあって人間の求めるものも多様であり、学生の気持ち（心情）や価値観、さらには個性を的確かつ客観的にとらえることは非常に難しい。しかし、このような社会状況において学生を理解し、大学における教育が効果的に実施されているかを知ることは重要であり、意

義あることと考える。

そこで、今回、在学生がどのような学生生活を送っているのか、生活の実態と適応について調査することにより学生の理解を深め、より効果的な学生指導やカリキュラム等の再構築のための一助として実態調査を行った。その結果、学年毎の傾向がみられたので報告する。

I. 研究目的

本学の全学生における大学生生活の適応の実態を把握する。

II. 研究方法

1. 対象：本学学生 196名（平成2～4年度生）
3年生（1回生）66名、2年生（2回生）66名、1年生（3回生）64名
2. 時期：平成4年4月下旬および同年9月上旬
3. 調査方法：質問紙調査法

質問項目には多肢選択項目と自由記述項目を設けた。4月の調査は、生活の実態調査を中心に、9月に生活の適応状況について実施し

た。また、1 学年については一部質問内容を削除した部分もあるが、質問の各項目とそれに対する回答率 (%) を表 1~13 にまとめた。

調査内容は以下について、基本的な項目を作成し、各学年とも 20 分~30 分の時間を設定して実施した。

4. 調査内容

1) 学生生活の実態

(1) 生活環境について

①居住 ②通学時間とその方法 ③生活費

(2) 生活の過ごし方について

①学習時間 ②クラブや同好会活動状況
③放課後の過ごし方 ④アルバイトの実施状況 ⑤休日の過ごし方

2) 学生生活への適応

(1) 入学の動機について

①入学の動機 ②短大を選んだ理由

(2) 学生生活に望むこと

(3) 学生生活への満足・不満について

①学生生活に対する意欲度 ②学生生活に対する満足度 ③不満なこと

(4) 現在の悩みについて

①悩みがあるか ②悩みの内容 ③相談のできる友人 ④相談のできる教員

(5) 教員とのふれ合いについて

(6) 講義内容について

①講義内容への満足度 ②特に努力を必要とする科目

なお、項目の作成にあたっては、柳井氏の質問紙法¹⁾による調査作成を参考にし以下の点に注意して項目を作成した。

- a) 質問文はできる限り短くする。
- b) なるべく具体的な表現にする。
- c) 質問内容が、違った意味に解釈されないようにする。
- d) 質問に対して、解答できる知識や情報を持っている内容にする。
- e) 意見を聞くのか、事実を聞くのか、区別する。
- f) 意見を偏った方向で解答させないようにする。
- g) 個人のプライバシーを傷つけないように

する。

III. 適応について

私たちの日々の生活は、個々を取り巻く自然環境や社会的な種々の要因からなる環境の中で営まれている。その中であって適応するという事は、その状況によくかなうことであり、人間の置かれた社会的環境や状況に対して適合するように自己の習性などを変化させていく人間の行動のバランスであり、社会的適応とも呼ばれる。また、適応には、自分を現在の環境に対してできるだけ合わせていくような受動的適応と、自分の適性や自分の理想を実現するために環境そのものを変える努力をする能動的適応がある。適応の過程では、周囲の環境に対する悩み・苦しみ・不安・欲求・不満などが生じてくるのがごく当然のことである。フランクル V. E. Frankl が主張しているように生きることへの意味の追研や自分の経験の理由の探究が「生きがい」となり、マズロー A. H. Maslow が強調するように自己実現や成長の動機が自己を形成するうえで、本来的な欲求や生きがいでありこれらに支えられて人として生きる営みの過程が適応の過程であるとも考えられる。また、欲求がかなえられない場合に不適応の状態であるとは言えないが、欲求不満 (Frustration) や葛藤 (Conflict) を無視してよいというわけではない。学生が現実的に自己を受容し、自分を取り巻くさまざまな問題を解決する技能を持ちながら他者とのあたたかい人間関係を維持し発展させ、より成熟した生き方を追求していくうえにも、人格心理学者オルポット G. W. Allport が提唱するように、人間を統一ある 1 つの全体としてとらえることが重要である。そして、ひとりひとりが独自の生き方を模索する存在であるとして「生成過程にある存在」(A being in the process of becoming) とよんでいるが、まさに私たちが適応を考えるうえで最も重要な視点であると考えられる。

IV. 結 果

回収は、1 年生 64 名、2 年生 66 名、3 年生 61

名で全回収率が97.4%である。

1. 学生生活の実態

(1) 入学後の生活環境について

①居住場所：岩手県内出身が大分部を占めることから、50%が自宅から通学しており37%がアパート住まい、下宿が12%、その他である。

②通学時間と方法：バス通学が35%、電車通学が8%、自動車通学が11%、バイク通学が4%、自転車通学が17%、徒歩通学が22%、その他と続くが3年生ともなると、自動車通学が1年生の5倍に達する。通学にかかる時間は、74%が1時間以内で登校しているが、中には1時間以上もかけ電車やバスを乗り継いで通う学生が11%いる。

③生活費：お小遣いも含むめて1ヶ月の生活費が5～10万円以内が19%、10～15万円以内が26%を占めている。しかし、41%の学生が不明と答えており、自宅からの通学生が多いためか生活費についての意識は低かったようである。

(2) 学生生活の過ごし方について

①学習時間：日頃の学習時間を、試験直前などの特別な時間を除いて集計した結果である。各学年を比較して1年生が最も学習時間が多く、一日当たり1時間半から2時間半を学習時間に当てている。2年生では、『あまりしていない』が多く、平均して一日当たり1時間に満たない。さらに3年生では39%が『全くしない』と答えている（表1参照）。

②クラブや同好会活動状況：4月の調査の項目で、1年生については未調査の部分である。2年生と3年生を比較すると、3年生の55.7%が加入しているのに対して、2年生は『未加入』と『今後も加入しない』を合わせると66.7%で課外活動に対する関心が低い（表2参照）。

③放課後の過ごし方：2年生・3年生共に半数以上が講義が終了後まっすぐ帰ると答えている。次に、ショッピングや何となく

表1 学習時間

単位：%

項目	1年生	2年生	3年生
かなりしている	0	1.5	0
適当にしている	59.4	47.0	13.1
あまりしない	37.5	50.0	42.6
全くしない	3.1	0	39.4
その他	0	1.0	4.9

表2 クラブや同好会活動状況

単位：%

項目	2年生	3年生
加入	15.9	55.7
未加入	49.3	36.1
今後加入を考える	1.5	0
今後も加入しない	17.4	3.3
関心がない	15.9	4.9
無回答	0	0

表3 放課後の過ごし方

単位：%

項目	2年生	3年生
クラブやサークル活動をしている	0	1.2
アルバイトをしている	12.1	9.2
講義が終わったら、まっすぐ帰る	53.5	65.5
学内で友人とおしゃべりしている	6.1	8.1
図書館で勉強してから帰る	2.0	0
ショッピングや散策している	21.2	13.8
その他	5.1	2.2
無回答	0	0

ブラブラしている学生が多い（表3参照）。

④アルバイトの状況：アルバイトを行っている学生は、2年生では27.7%、3年生では11.5%でほとんどの学生はアルバイトを行っていないようである。内容は、2年生・3年生共に『喫茶店・レストランなどのウェイトレス』が最も多く、次に『スーパーやデパートの販売兼レジ係』が多い。回数は1週間に1～2回程度で、収入は平均2～3万円が最も多く、なかには毎日行って5万円以上の収入を得ている学生もあるが、得た収入のほとんどを自分の小遣いにして、衣料費や生活費の一部に充てている。

⑤休日の過ごし方：約半数が掃除や洗濯を

して部屋で休息しており、次にショッピング等で外出し、学習や読書する割合は10%～11%と低くほとんどの学生がのんびりと自宅で過ごしている。

2. 学生生活の適応

(1) 入学の動機について

①入学の動機：各学年が共通して最も多いのが『看護婦の資格を取るため』である。次ぎに3年生では、『高校の先生や身近かな人の勧め』『学力的にも相応する』から入学を希望した学生が多い。1年生と2年生では『施設設備が充実していること』『自宅から通学が可能』など経済的な理由が多く、『短大卒業の学歴が欲しい』ことも多くの学生が動機として上げている（表4参照）。

②短大を選んだ理由：1年生では『一般教養も学べ、広い知識が得られる』『看護をよ

り深く高いレベルで学び技術を得る』『学歴をいかして、有利な就職先と指導者を目指す』などを第一の理由として上げている。2年生では『学歴をいかして、有利な就職先と指導者を目指す』が31.8%と最も多

表4 入学の動機 単位：%

項目	1年生	2年生	3年生
看護婦の資格を取るため	33.0	37.6	34.3
学校の評判が良い	2.0	0.6	0
高校の先生の進め	8.0	7.1	10.5
近親・知人・友人の勧め	8.7	6.5	11.9
学力に相応していた	4.0	7.1	13.3
自宅から通学できる	10.0	7.1	12.5
経済的理由	0	11.2	1.4
短大卒業の学歴が欲しい	8.0	10.6	2.8
大学の4年は長い	0	1.2	0.7
施設・設備が整っている	23.0	14.1	7.0
何となく	0.6	1.2	3.5
その他	2.3	1.2	2.1

表5 短大を選んだ理由

単位：%

項目	1年生	2年生	3年生
一般教養も学べ、広い知識が得られる	25.4	6.1	12.0
施設や設備が充実し、講師の先生もすばらしい	3.4	9.1	6.0
学歴いかして、有利な就職先と指導者を目指す	28.8	31.8	16.0
進学のため（大学、保険婦・助産婦の学校）	5.1	4.5	12.0
看護をより深く、高いレベルで学び技術を得る	27.1	10.6	6.0
看護婦の資格を取得するための最短コースである	3.4	10.6	2.0
高校の先生や両親の勧め	0	6.1	4.0
自分の学力に合い、受験が可能（受験科目や時期）	0	12.1	24.0
その他（通学が可能など et）	6.8	9.1	18.0

表6 短大生活に望むこと

単位：%

項目	1年生	2年生	3年生
自由で楽しく、適度な遊びと学習をすること	19.1	20.5	17.4
無事に何事もなく、卒業したい	2.7	2.6	4.3
充実感・満足感を得るために、何事にも積極的に取り組む	28.2	15.4	20.3
友人や教員を通じ、精神的成長と人格形勢をしたい	9.1	12.8	17.4
国家試験合格のための学習をしっかりとやりたい	8.2	4.3	2.9
高いレベルの学習や知識を身につけたい	27.3	15.4	4.4
特になし	1.8	6.0	2.9
その他（余裕のある時間割り、厳しさなど）	1.8	6.8	10.1
無回答	1.8	16.2	20.3

く、3年生では『自分の学力に合い、受験が可能だった』が24%と最も多い(表5参照)。

(2) 学生生活に望むこと

この設問については自由記載とした。その内容として『充実感・満足感を得るために、何事に対しても積極的に取り組む』『高いレベルの学習や知識を身につけたい』と大半の学生が上げている。特に、2年生では『自由で楽しく、適度な遊びと学習をする』が最も多く、3年生では、『無回答』が20%であった(表6参照)。

(3) 学生生活への満足・不満について

①学生生活に対する意欲度：『非常に意欲的』と『やや意欲的』を合わせると、1年生で48.4%、2年生で31.8%、3年生では16.4%で学年が進むにつれて減少の傾向がみられる。さらに、3年生では『やや意欲が減退している』29.5%、『非常に減退している』8.2%で意欲の減退を示している。1・2年生の中にも『やや意欲が減退している』と約13~17%が答えていることも見逃せない(表7参照)。

②学生生活に対する満足度：講義内容を除いて、1年生では67.2%が満足傾向を示

表7 短大生活に対する意欲度 単位：%

項目	1年生	2年生	3年生
非常に意欲的である	7.8	4.5	1.6
やや意欲的である	40.6	27.3	14.8
どちらとも言えない	39.1	51.5	44.8
やや意欲が減退している	12.5	16.7	29.5
非常に減退している	0	0	8.2
その他	0	0	1.6

表8 短大生活の満足度(講義内容を除く) 単位：%

項目	1年生	2年生	3年生
満足している	17.2	7.6	3.3
まあまあ満足している	50.0	40.9	24.6
やや不満足である	21.9	28.8	44.3
不満足である	6.3	6.1	16.4
何とも思わない	4.7	15.2	8.2
その他	0	1.5	3.3

し、2年生では『満足している』48.5%、『何とも思わない』15.2%と答えている。3年生では、27.9%が満足を感じている反面、50.7%と約半数の学生が『やや不満足』『不満足』と答えている(表8参照)。

満足している内容としては、各学年共に『特になし』が最も多く、次いで、1年生・2年生が『友人関係』が多く、3年生では、『自然環境や大学の設備』をあげている。

不満なことについては、各学年に共通して『交通の便が悪いのでスクールバスがほしい』と望んでいる。また、1年生では『無回答』『なし』を合わせると26%、『休みが少ない』12.4%、『カリキュラムがきつくて多忙である』『全体に楽しくない』が6.9%と答えている。2年生では『無回答』『なし』22.8%、『カリキュラムへの不満』が20.3%と高い値を示している。3年生になると『無回答』『なし』が21.7%で、次いで『カリキュラムへの不満』が16.9%を占めている。各学年を比較して見ると、1年生は各所に不満を感じ、学生生活に対する期待の大きさを感じさせ、2年生になると自分自身に直結した講義や実習、教職員への不満に絞られてきている。3年生になると再び不満な事柄が増すが、不満の最も多かった交通の便については自家用車で通学する学生が増えて、不満を訴える学生は激減している。しかし、無回答の数が増えていることは、無関心な学生が多いことも示している(表9参照)。

(4) 現在の悩み

①悩みがある：1年生と2年生に4月と9月の2回調査した。1年生では、4月が63%であったのが9月には69%と増加している。2年生では、逆に62%から58%に減少している。3年生は1回の調査であるが、78%と高い割合で悩みが多い。

②悩みの内容(複数回答とした)：1年生では、学習面での悩みが2回の調査とも最も多く約45.5%、次に自分の将来の就職や進学について約30.2%が悩んでいる。2年生

表9 不満なこと

単位：%

項 目	1年生	2年生	3年生
	交通の便が悪い	17.8	21.5
学食の品数が少なく、値段が高い	4.1	1.3	3.6
図書館や学校の閉鎖時間が早い	4.1	0	0
クラブ・サークルが少なく、不活発	1.4	0	2.4
諸経費がかかる	2.7	1.3	1.2
休みが少ない	12.4	0	3.6
全体に楽しくない	6.8	2.5	3.6
課題や宿題が多い	4.1	0	0
行事が少ない	2.7	0	0
教員・職員対応が不親切	1.4	8.9	2.4
講義の内容や実習について不満	5.5	6.3	12.1
カリキュラムがきつくて多忙である	6.9	20.3	16.9
講義以外の時間の利用に計画性がない	0	0	7.2
試験の機会が少ない	0	5.1	0
友人関係やクラスのとまとまりがない	0	2.5	3.6
施設や設備が不足している	2.7	2.5	8.4
大学の周囲に、何も ない	1.4	2.5	2.4
その他	15.1	7.6	2.4
無回答	2.7	2.5	1.2
	8.2	15.2	19.3

表10 悩みの内容

単位：%

項 目	1年生		2年生		3年生
	4月	9月	4月	9月	4月
勉強のこと	25.7	30.2	16.7	20.8	15.6
看護技術の習得について	9.7	7.6	12.3	8.8	10.1
実習のこと	7.1	4.2	12.3	17.6	9.1
学内での友人との関係	8.9	9.2	5.1	3.2	1.5
クラブ・サークル活動について	4.4	2.5	0	0	1.0
学友会のこと	0	0	0	1.6	3.5
自分の将来について	15.9	15.1	19.6	15.2	19.1
自分の健康について	1.8	3.4	5.1	7.2	8.0
就職・進路について	13.3	15.1	18.1	16.0	19.6
家庭のこと	1.8	1.7	0.7	2.4	3.0
経済上の問題	3.5	5.9	5.1	4.0	5.0
アルバイトのこと	4.4	1.7	0	0	0.5
学外での友人・人間関係	2.6	1.7	3.6	1.6	4.0
その他	0.9	1.7	0.7	1.6	0

では、学習面については4月の調査で41.3%であったが9月は47.2%に増加し、将来については37.7%から31.2%に減少している。1年生と比べると友人関係や経済的な悩みなどが減少傾向を示している。

3年生では、最も多い悩みが自分の将来(就職や進学)について36.7%が悩み、次に学習面での悩みが34.8%である。各学年を通じて学習面で悩む内容は、1年生は講義などの一般的な学習についての悩みが中

心で、2年生になると看護技術の習得の悩みや実習についての悩みが増えている。3年生は看護婦の資格を取るための国家試験を意識してか、学習面で全般に渡っての悩みがある（表10参照）。

③相談のできる友人：1年生で89.0%、2年生で93.0%、3年生で93.4%が悩みを相談できる友人がいると答えている。

④相談のできる教員：1年生や2年生は悩みを相談できる教員は、13.4~19.5%と少ないが、3年生になると36.1%と増えており、教員とのコミュニケーションが取れるようになってきている（表11参照）。

(5) 教員とのふれ合いについて

教員とのふれ合いについて満足を感じている学生は、1年生で57.9%、2・3年生では68.9%~72.7%と増えている。また、教員とのふれ合いに不満を感じている学生は、1年生が34.3%、2年生が25.8%、3年生では13.1%と極端に低くなっている。これは、2年次後半から集中的な臨地実習が開始され、少人数のグループ制で担当教員を中心としたグループカンファレンスや指導がなされることから、友人や教員との接触が多くなり、よりふれ合う機会が多いためとも言える（表12参照）。

(6) 講義内容について

①講義内容についての満足度：『まあまあ

表11 相談のできる教員はいるか 単位：%

項目	1年生	2年生	3年生
いる	13.4	19.5	36.1
いない	35.4	30.5	27.8
分からない	51.2	50.0	36.1

表12 教員とのふれ合いに満足しているか 単位：%

項目	1年生	2年生	3年生
満足している	6.3	15.1	14.8
まあ満足している	51.6	57.6	54.1
やや不満である	31.2	19.7	13.1
不満である	3.1	6.1	0
その他	7.8	1.5	18.0

表13 講義内容について満足しているか 単位：%

項目	1年生	2年生	3年生
満足している	12.5	10.8	9.8
まあ満足している	28.1	42.8	37.7
やや不満である	37.4	24.8	26.2
不満である	6.3	3.9	8.2
何とも思わない	9.4	7.8	3.3
無回答	6.3	10.1	14.8

満足している』も含めると、1年生では46.6%、2年生では53.6%、3年生で47.5%が満足し、約半数の学生が満足している。しかし、『何とも思わない』『無回答』が1年生で15.5%、2年生で17.9%、3年生で18.2%と無関心な学生もかなりの割合でいる（表13参照）。

②特に努力を必要とする科目：1年生では、専門基礎科目（病理学、解剖学、生理学など）が34.7%と最も多く、次に外国語科目（英語、ドイツ語）21.7%、一般教養科目（文学、社会学、生物学など）が12.9%である。2年生では、専門基礎科目が15.5%。次に、疾病論（成人疾病論、小児疾病論など）13.3%、基礎看護学（看護概論、基礎看護技術など）11.2%である。3年生では、専門科目と疾病論が13.1%と最も多く、次に臨床看護実習が11.4%と多い。各学年ごとに開講される科目で、特徴づけられていると思われるが、新しい分野を学び理解していくが学生にとって、たやすいことでないことが伺える。

V. 考 察

短大生の時期は、青年期後期とも呼ばれ成人期への移行期として位置づけられており、新しい自我を形成し、身体、性、情緒、知能や思考、社会性などのあらゆる面で成熟してくる成長過程の重要な時期である。また、この時期は、モラトリアム（psycho-social moratorium）の時期とも呼ばれ、身体的・性的には成熟した存在である一方で社会生活の面では一人前でないため、青年期の特徴のひとつとしてとらえられて

いる。このような現象は、生活経験等の違いによって大きな差が生じると考えられる。学生が自らの学生生活を意欲的に様々な経験を体験しながら、自我の形成や社会性を獲得していく大切な時期である。そこで、学生が短大に入学した後の生活状況と、短大に対する学生の気持ち(心情)や考え方を探りながら、学生生活の適応状況を検討した。

1. 学生生活の実態

学生の生活パターンは、講義をほとんど休まず出席し、講義の終了後はすぐに帰路につく学生が大部分で、放課後に図書館で勉強したり読書をしたりすることが少ないことなどから、短大での講義と日常生活とがきり離れた状況であることをうかがわせている。本学の学生の半数以上が自宅から通学し、また、市内の中心部より離れていた場所に短大の施設があることから、市内に出るまで時間がかかるなどの交通の不便さが帰路を急がせているとも考えられる。帰宅後の学習に充てる時間は、学年が進むにつれ減少しており、1年生で1日平均で1時間半から2時間半程度であるのにたいし、2年生では1時間に満たず、3年生になると全くしない学生が4割近くに達している。3年生は、ほぼ通年にわたり臨地実習があり、学内での受動的な学習とは異なり毎日の実習記録や課題達成のための学習が多い。このことは看護学生にとって重要な学習であるが、学生にとっては各自の目標を持った積極的な学習とはとらえられず、学習に取り組んだという実感をもてないために『全くしない』という答えになったとも考えられ、学習意欲の減退とは言い切れないのではないだろうか。

看護学生にとっての学習は、学内で学んで知識・技術のみならず、臨地実習における対象との関わりを通して体験すること全てが学習であり、その体験を振り返り分析・評価し科学的根拠を見いだすことも大切である。学生時代に学んだ全てのことを、個々の学生の看護観の確立につながっていることを意識し

ながら学生と関わることも重要と考える。

クラブやサークル活動への参加および関心度は、クラブやサークルへの未加入や無関心を合わせると半数以上を占めており、この傾向は本学のみならず他短大や大学にもみられることでもある。しかし、多くの学生が個人中心の生活を送り、日常生活を平坦に過ごしている。その中で、学生が意欲的に個々の学生生活を考えて生活しているようには考えにくい。上地の調査研究^{2,3)}にあるように、学生を取り巻く大学生活の環境がかなり平穏な雰囲気であり、社会情勢や時代の変遷に関係されずに生活しているともいえる。また、一般の大学と比較すると看護教育では、臨地実習が総時間数の約3分の1を占め、選択科目があっても選択の余地のない程の過密なカリキュラム構成のため、慢性的な睡眠不足感や疲労感があり、日々の生活における精神的なゆとりのなさも短大生活への意欲の低下をまねく原因の一つとも考えられる。教育方法のうえで、少人数制のゼミナールなどの工夫を取り入れて、意欲的な思考を養うことも必要ではないだろうか。

2. 学生生活への適応

本学の学生は一般の短期大学とは異なり、看護婦の資格を取得して職業に就き、病んでいる人の役に立ちたいという自覚を入学当初から持ち、さらに、専門性を追求するために進学を希望する学生や看護職の指導者を目指して入学してきている。それは、学生の多くが短大生活に望むこととして「高いレベルの学習や知識を身につけたい」とあげていることから裏づけられる。また、短大生活に望むことは「充実感・満足感を得るために、何事に対しても積極的に取り組む」が、1年生と3年生で高く、「自由で楽しく、適度な遊びと学習をする」が2年生で最も高く、3年生にも比較的高率でみられている。これは、入学時は学生個々が抱えている目標に向かって進もうとする気持ちが強く、2年生になると短大生活に慣れ、自分の生活を自由に楽しく

過ごしたいという気持ちの強い現れと思われる。そして、3年生になると入学時の目標を再確認し、それを達成しようとする気持ちと、残り少ない学生生活を充実感・満足感が得られるよう自由を楽しみつつ、自己形成を図りたい気持ちが交錯しているように感じられる。

短大生活に対する意欲や満足度は、1年生が意欲的で満足度も高いが学年が進むにつれ減少し、2年生では「意欲があるともないとも言えない」と約半数以上が答え、3年生では不満足が半数以上を占め、さらに4割以上が「意欲の減退」と述べている。講義や実習に対する不満や毎日の生活への不満を持ち、自分の健康に関する悩みが急激に増えている。これは、臨地実習が長期間に及ぶことや、学生が学問として学んだことを経験を通して再確認しながら自分の能力不足や患者に対する関わりの難しさを身を持って体験することが、精神的・肉体的にかなりの負担になっていると考えられる。

3. 学生生活における学年別の傾向

1年生は、学習を含めて何事に対しても積極的・意欲的に取り組もうという向上心が強く、学生生活に期待するものも多い。この時期は、今まで受けてきた受動型の教育とは異なり主体的な学習が求められ、自分の置かれた状況の変化を受け入れて適合しようとする受動的適応行動がみられる。

2年生になると、友人や教員との関係、講義内容に満足傾向を示し、学生生活全般に適応してきているが、今まで以上の変化を求めようとする意欲は低下している。このことは、自分の適性や自分の理想が徐々に明らかになってきても、それらの実現のための行動を起こすまでには至っていないと考えられる。それは、学習の困難さを実感しながらも、学習以外の個々の生活を楽しもうとする傾向が強いということからも言える。

3年生では、学生生活における充実感・満足感を得るために、何事に対しても積極的に

取り組みたい気持ちがある反面、長期間に及ぶ臨地実習のため、精神的・肉体的にゆとりをもてない状態で不満感も強い。学生は、臨地実習での体験やその他の様々な経験から自分の適性や自分の理想が明らかにされ、これからの自分の生き方やあり方を模索しながら、長期間にわたる臨地実習に適応しようとするあまり、自己の欲求や生活が満たされず意欲の減退を引き起こし、欲求不満の状態にあったと考えられる。

このような学年別の傾向から、1年生が入学時に抱いていた目的や学生の意欲を大切に、これが2年生にも持続されて学生の積極かつ主体的な学習への取り組みと意識を高めるために、学生のニーズを反映した講義内容の検討や教育の展開が必要と考えられる。また、3年生では、実習での体験を振り返るとともに講義で学んだことを統合し、看護師としての自己のあり方を考え、さらに今後の自分の生き方を見つめ直すことができるような教員の関わりが必要ではないだろうか。

学生は3年間で、看護の方法を認知領域、精神運動領域、情意領域の3領域の面から教育を受け、特に知識・技術といった認知領域や精神運動領域に重きを置いた教育が実施されることが多い。しかし、看護は人間の生・老・病・死に深く関わり、対象である病人と看護師の相互関係の中で行われ、また看護師としての態度もその中で培われる。そして、人間をかけがえのない存在として援助していくことの大切さを知ることでもできる。このような意味においても、学生の感性を高め、常に幅広い知識を求めようとする意欲を育てる情意領域を伸ばすこともより重要なことである。さらに、学生が3年間に受けてきた看護教育の統合として卒業研究に取り組むめるように配慮する必要があると考える。

VI. 今後の課題

青年期は、自己の将来への期待と不安の間でありながら、自己の内部に新しく生まれてきた要求の意味を検討し、今までに形成されてきた

多数の同一性を取捨選択してゆきながら自己の統合性を回復し、価値観や職業の選択を果たしていかなければならない時期ととらえられている。看護学生は、臨地実習を通して一般の大学では体験することのないような経験を積みながら、国家試験や就職、進学に向けての学習し、人生の分岐点となる時期を迎え、それぞれの人生を選択していく。しかし、過密なカリキュラムの中に適応できず苦悩している学生もいる。佐々木の調査⁴⁾にあるように、診療内科受診する看護学生は、会社員（幹部管理職を含む）や主婦らと同様に、うつ状態やストレスを多く持つという報告もある。多くの看護学生が、現状に適応できず欲求不満に陥りやすい状況にあるということが言えるのではないだろうか。今回の調査で、最終学年の3年生に学生生活に対する不満が強くみられたことから、学生の置かれている状況を再検討する必要性を感じている。また、この時期に学生が自己の目標に邁進できるように、学生個々が抱えている問題や悩み、将来に対する不安などをできるだけ早期に把握し、学生自身で対処行動がとれるような指導的な教員の関わりと具体的なシステムを作る必要がある。さらに、自分の力で自分の人生を切り開いていけるような環境づくりも重要であると考える。

最後に、学生が現状にスムーズに適応でき、学生の目標とする専門的能力を積極的に学び、自信と意欲を持って臨地実習に臨み、かつ“ゆ

とり”が持てるようなカリキュラムのあり方が望まれる。そのためにも、本学における教育が学生と教員との知的な相互交流のもとに展開され、看護の質的向上につなげられるべく教育評価を徹底し、講義内容や教授法等の充実化に向けての努力と、教員の一層の研鑽が必要と考える。

おわりに

今回の調査は、高度かつ専門化され細分化された医療技術と高齢化社会に即応する看護教育を実践するにあたり、本学で教育を受けている学生の実態を把握するとともに、学生生活への適応の現状を把握するために実施した。結果の分析に不十分さを感じるが、学年別の傾向をとらえることができた。より変動する社会情勢にあって、学生の気持ち（心情）を的確にとらえることは非常に難しいが、その時代にある学生の実情をとらえることは、大学教育のあり方や学生指導のあり方を検討するうえにも意義あるものと考えられる。

本調査にあたっては、調査当時には小池明子名誉教授のご指導を頂き、さらに各担任の先生方のご理解とご協力のもとに実施できたことを深く感謝するとともに、回答して下さった学生の皆さんに厚くお礼を申し上げます。また、最終原稿の校閲を矢川寛一教授、菊地芳子教授に頂き、適切なるご助言に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 柳井晴夫：質問紙法による健康調査票作成の原理とその手順について、保健の科学、33(10)；658-662(1991)
- 2) 上地安昭・他：大学生の意欲減退に関する実態調査研究(1)、広島大学保健管理センター研究報告書「PHOENIX-HEALTH、No.6」(1973)
- 3) 上地安昭：大学生の意欲減退に関する実態調査研究(2)、広島大学保健管理センター研究報告書「PHOENIX-HEALTH、No.6」；69-76(1980)
- 4) 佐々木順子：ストレスと運動、第15回日本心身医学会近畿地方大会、1月(1991)

参考文献

- 1 エリクソン、E. H. 著、岩瀬庸理訳：主体性——青年と危機、北望社；1969
- 2 加藤 隆：青年期の意識構造、誠信書房、1991
- 3 小林利宣：心理学中辞典、北大路書房、1992